

## 1. 外国につながる生徒の授業における日本史の扱い

外国につながる生徒の取り出し授業で日本史部分を扱うのはなかなか困難である。中学校の歴史の授業は、在籍していたとしてもほとんど理解できていない。

また、母国で中学校を卒業してから来日した生徒たちは、日本史をまったく知らない。日本の地理も知識が不十分で、国内旅行の経験がある生徒も少なく、首都東京の場所さえよく知らない生徒もいる。

生徒たちにとって、漢字の習得は大変な負担であり、歴史上の日本人の顔や名前は覚えにくく、歴史事項の名称は、植民地 colony や憲法 constitution のように各言語にも同じ概念がある事項と異なり、尊王攘夷、廃藩置県、富国強兵など、対応する外国語はなく、意味内容を各言語で説明するだけで、語彙としては日本語で覚えなければならぬ。

「歴史総合」は、中学校までに習得した知識を前提として、歴史について「考える」ことをねらいとする科目である。外国につながる生徒たちにとっては、勉強したことがない内容を前提にしている。現代を学ぶことが中心の教科書で、日本史の具体的な事項や知識を逐一説明していたのでは、とうてい歴史の全体をつかむことはできないし、進度も非常に遅くなる。

彼らにとっては、日本史は「外国の歴史」である。生徒それぞれには、「母国の歴史」があり、母国の中学校で教えていることが多い。そこで、教科書における「日本人にとっての日本史」の位置づけを離れ、世界史の中の日本ととらえて、歴史の流れの大枠をつかむ程度にしたい。

## 2. 具体的な取り上げ方

### (1) 大枠でとらえて省略した事項

- ・幕末史の具体的な事項の説明は省略する。江戸時代の知識がない状況で、その崩壊だけを取り上げて理解は困難である。歴史総合の学びの中心は近現代史なので、江戸時代について、知識を補充する必要はないと判断した。天皇、倒幕の概略をつかませたい場合に使えるパウポを用意した。それまでの幕府と朝廷の複合的支配構造が中央集権国家にかわる過程を、イラストで示した。
- ・明治維新についても、具体的な事項は省略して、中央集権国家、近代国家の確立に関わる事項にしばった。

### (2) 日本史知識の補充策

- ・日本史についての知識を補充するには、生徒それぞれが母語でネット上から情報を得る方法があるが、教員側でどの生徒がどんな知識を学び取ったかを確認できない。
- ・共通の基礎知識を身につけさせたいと考えるなら、ネットでダウンロードできる教材「こんにちは日本の歴史」(イラスト、やさしい日本語、多言語訳で構成)を使う

と、最低限の共通の知識を獲得させることができる。

日本史を扱う単元の「予習プリント」は、「こんにちは日本の歴史」を読むことを前提に作成している。

- ・本シリーズの「日本史探求」を使って、明治の時期の教材を活用することもできる。

### (3) 補足した内容

- ・天皇とは何かを補足した。天皇、皇帝、首相、大統領の違い、日本では誰が権力を持っているのか、政治を行っているのか、学んだことがなく知らない生徒が多い。戦前期の日本の理解に天皇の知識は必要であると判断した。
- ・「都道府県」という呼び方が「地方自治体」と同義語で使われていることに気づかないことが多いため、加えた。
- ・憲法とは何かを補足した。公共を先に学習するカリキュラムの学校で「日本国憲法」を先にしっかり学んでいるなら問題ない。しかし、歴史総合を先に学ぶ学校では、外国につながる生徒は、憲法とは何かについてや、日本国憲法の内容も学んでいない。もしも歴史総合の授業が、戦後世界まで進まなければ、「大日本帝国憲法」だけを学ぶことになり、これが今の日本の憲法であり、憲法とはそういうものだ、と誤解する危険性が高い。